



特別賞 紀伊國屋書店賞

書評 関口義人著『ジプシーを訪ねて』（岩波書店 2011年）

（中央新書・文庫コーナー：岩波新書 新赤版 1291 ほか）

法学部2年 多田憲助

私が「ジプシー」の存在を知ったのは、中学生の頃、とあるアニメ映画を観たときのことだった。

近代ヨーロッパを舞台とするその中で、浅黒い肌にエキゾチックな衣装を纏っていたそのキャラクターは、当時の私にとってとても印象的に感じられ、流浪の民として各地を転々とする生き方は、私の好奇心を刺激した。だから、あれから何年も経っているにも関わらず、この本のタイトルを見たときにほんの少し、心が躍ったのだろう。

本書は5章から成り、第1章「ジプシーとは誰か」でジプシーの定義や先行研究を紹介し、第2章「ジプシーに分け入って」ではバルカン半島から中欧の、第3章「ドムたち」ではアジアや中東のジプシー達との出会いをまとめている。第4章「ジプシー・ミュージック」では、ジプシー独自の音楽の歴史を追っており、第5章「ジプシーを知る、ジプシーを見つめる」には、ジプシーに関する研究文献が紹介されている。

「ジプシー」はほぼ世界中に暮らしていることが確認されており、定住化も進んでいるが、多くの国々で正式な市民として登録されておらず、正確な人口や分布はわかっていない。また、現在では彼らを「ロマ」と呼ぶのが一般的だが、その呼称を拒絶するジプシーも多数存在している。

この本の中で私が特に興味を惹かれたのは、第2、3章の筆者が各国を巡り、様々なジプシーと出会う部分である。この章は多くの短いストーリーがまとめてあり、ジプシーを探して各国を旅する気分を味わえる。一つ一つは非常に断片的な記録であるが、それらが積み重なることで、「ジプシー」という概念の全体像が浮かんでくる。

彼らの暮らしは、国や地域によって大きくその様相が異なる。難民キャンプのような場所でも明日をも知れない暮らしをしている者もいれば、商売で成功し、豪邸に住む者もいる。

特に胸に残っているのは、第3章の著者の言葉である。ケシャンという都市には音楽を生業とするジプシーが数多くおり、成功を夢見る人々がカフェに集う。微かな可能性に縋る彼らを見て、著者は「ここに集まってありそうもない『幸運』を待っている。私は彼らの大部分は幸運を得られないと思う。しかしそれが人生だし、それが彼らにとって普通の生き方なのだろうと思った。」「『希望』だけは持ち続けながら彼らはケシャンのカフェに通い続けるに違いない。」(P.118) と言う。残酷で諦観に満ちたその言葉の中に、私は不思議と温かみを感じた。そこには、ジプシー達を長年見つめてきた著者の、深い眼差しがあるのだと。

私は、現代においてジプシーがこんなにも多彩な人生を送っていることなど知らなかった。この本を読んで、私が感じ、認識する世界は少しだけ広がった。本を読むことで、私達は未知に触れられる。そしていつか、私は本で知った世界を旅してみたい。そこにはきっと、次なる出会いがあるだろうから。